

聖書：士師記 13：1～25

説教題：サムソンの誕生

日時：2014年9月14日

いよいよ士師記に出て来る最後の士師サムソンの物語がここから始まります。前に士師記は螺旋階段を下るごとく、「一層墮落して」という時代であったことを見ました。そういう時代のクライマックスとして、このサムソンの記事があると見て良いと思われれます。私たちは大きな期待と注目をもって彼の生涯を見ます。そこに確かに彼の偉大な働きを見ることができます。しかしこれまでの士師たちと同様、いやそれ以上に、「こんなことで良いのだろうか？これが神が立てた士師なのだろうか？」とクエスチョンマークのつくところがたくさんあります。そして彼の生涯は最後、衝撃的な仕方で閉じられることとなります。私たちはここに士師時代のイスラエルの姿を最も象徴的に見るのです。このサムソン物語こそ、「まさに士師記！」というべき箇所です。そして私たちはその混乱と悲劇のただ中にも「神の勝利」を見て行くことになるでしょう。

1節：「イスラエル人はまた、主の目の前に悪を行なったので、主は40年間、彼らをペリシテ人の手に渡された。」これまでも繰り返して来た表現です。しかし今回はいつも出て来る要素が一つ抜けていることにお気づきでしょうか。それは、イスラエルが主に叫んだという表現です。これはこの時のイスラエルは苦しみの中で主に叫び求めることさえしない状態にまで落ちていたということではないでしょうか。主に目を上げ、主に導いて頂こうとする思いさえなく、流されるままにどんどん落ちて行く彼ら。霊的無感覚に墮している彼ら。

しかしこの13章の始まりの部分が示していることは、主はなおもそのようなイスラエルをあわれみ、救いの働きを始めて下さったということです。彼らがもう求めないからと言って、彼らの行くままに放置されない。私たちはこの神の姿に、イスラエルの希望を見るべきです。またこのような神であられるがゆえに、今日の私たちがこうして保たれ、守られていることを思いみるべきでしょう。

主の恵みの働きは具体的にどのように現れたのでしょうか。まず主の使いはマノアという人の妻に現れます。彼女は不妊の女でした。彼女に主の使いは3節で「あなたはみごもり、男の子を産む。」と告げます。聖書ではしばしば、偉大な器が誕生する時、このような記事が出てきます。アブラハムの妻サラ、イサクの妻リベカ、ヤコブの妻ラケル、サムエルの母ハンナ、バプテスマのヨハネの母エリサベツ、…。これは私たちが神にこそ目を高く上げるためです。神

はただご自身の恵みによって私たちを救い、祝福してくださることを私たちが学び、一層神に望みを置く信仰に生きるためです。

主の使いはマノアの妻に述べます。4節5節：「今、気をつけなさい。ぶどう酒や強い酒を飲んではいけません。汚れた物をいっさい食べてはいけません。見よ。あなたはみごもっていて、男の子を産もうとしている。その子の頭にかみそりを当ててはいけません。その子は胎内にいるときから神へのナジル人であるからだ。彼はイスラエルをペリシテ人の手から救い始める。」ナジル人については民数記6章に記されていますが、そこには、ぶどう酒や強い酒を断つこと、頭にかみそりを当てないこと、死体に近づかないことの3点が記されています。ここでのマノアの妻への命令も内容的に同じです。しかしこの特徴は、サムソンが母の胎内にいる時からナジル人であると言われていることでしょう。普通ナジル人は、自分の意志によって、自発的に身をささげる人のことを言います。しかしサムソンに関しては、主が生まれる前から彼を取り分け、聖別しておられる。ここに、いかに彼が主からの特別なプレゼントとして、前もって選り分かれていたかということが示されています。果たしてサムソンは、この主の召命に忠実に歩む者となるのでしょうか。ぶどう酒や強い酒を飲まず、死体などの汚れた物からも食べず、頭にかみそりを当てないで生活するのでしょうか。

また主の恵みは続くマノア夫婦との会話の中にも示されています。マノアは8節で「ああ、主よ。どうぞ、あなたが遣わされたあの神の人をまた、私たちのところに来させてください。私たちが、生まれて来る子に、何をすればよいか、教えてください。」と祈ります。主はその祈りを聞き入れて下さり、再びご自身の使いを遣わして下さいました。そして先の言葉とほとんど同じ内容を繰り返します。本来マノアは妻からの報告を聞いて、すべてを信じていても良いはずでした。しかし主は私たちの弱さを忍耐されて、二度でも三度でもこのように繰り返し、語って下さる。私たちはここを読み、「展開にむだが多いのではないか」と思うかもしれませんが、主は悟るに遅く、受け止めるに鈍い私たちに合わせて、あえてこのようなペースを取ることを良しとして下さるということでしょう。

マノアは当時の一般的なもてなしの精神に従って、「あなたをお引き止めできますでしょうか。子やぎを料理して差し上げたいと思いますが。」と申し出ます。すると主の使いは、「わたしは食べません。」と言います。そしてもしささげたいなら主に全焼のいけにえをささげなさい、と言います。何となく会話が噛み合っていない印象を受けます。それは16節後半に、「マノアはその方が主の使いであることを知らなかった」からとあります。そこでマノアは17節で「お名まえは何とおっしゃるのですか。」と問います。それに対し主の使いは「なぜ、あな

たはそれを聞こうとするのか。わたしの名は不思議という。」と答えます。そして確かにそのような方であることが彼らの目の前で示されます。マノアが子やぎと穀物のささげ物を取り、岩の上でささげた時、何と祭壇から天に向かって上った炎の中を、主の使いは天へと上って行った。この瞬間、マノアは自分たちの前にいたのは主の使いであったと悟り、妻に「私たちは神を見たので、必ず死ぬだろう。」と言います。これは主のご臨在に触れた人が示す正しい反応です。かつてモーセに主は「人はわたしを見て、なお生きることはできないからである。」と言われました。しかし一方の妻は、こう述べます。「もし主が私たちを殺そうと思われたのなら、どうして全焼のいけにえとささげものを受け取られたでしょう、またこれらのことを私たちにみなお示しになったでしょう、またお告げになったでしょう。」と。彼女は主の不思議に接して恐れを覚えつつも、そこにある恵みのメッセージを正しくとらえています。すなわち主は聖なる方であり、恐るべき方であられるが、主は私たちを滅ぼすためにやって来られたのではない。主はその不思議な力を、私たちに恵みのみわざを行なうために発揮してくださる。主が不思議であられることに、私たちは恐れと同時に無限の慰めと希望を得て良い、と。

この出来事を経て最後 24 節 25 節にサムソンの誕生と、その幼少時代のことが短く触れられています。主は彼を祝福され、主の霊はツオルアとエシュタオルとの間のマハネ・ダンで彼を揺り動かし始めたとあります。サムソンは主から特別な力を与えられた人間となります。しばしば「怪力サムソン」と呼ばれます。その主の躍動感あふれる導きがこのように記されていると考えられます。またそれは無気力無感動に陥っているイスラエルを、この彼をもって揺り動かそうとする主の働きとしても見る事ができるでしょう。

以上のように士師記 13 章はサムソンの誕生を中心に書いています。そして幼少期の記事は、たったの 2 節だけ。次の 14 章からは成人したサムソンの働きが記されて行きます。このことで思い当たることはないでしょうか。それはイエス様の誕生の書き方も非常に良く似ているということです。マタイとルカの福音書はイエス様の誕生にまつわる出来事についてかなり詳しく記しています。そして成長してからの公生涯の働きについては当然多く書いています。しかし幼少時代についてはほんの少ししか書いていません。

なぜ士師記の著者は、このようにサムソンの誕生の記事を詳しく書いたのでしょうか。サムソン物語は 16 章まで続きますが、その 4 つの章の内、1 章がこのために費やされたのでしょうか。少なくともその意義の一つとして言えることは、主が下さる救いは思いつきのものではないことを示すということでしょう。ある意味ではこの 13 章がなくて、次の 14 章からサムソン物語が始まっても、大きな不都合はないでしょう。私たちはその場合、今度はサムソンとい

う人物が立てられて神の働きをしたのだな、とこれまで同様に読むでしょう。しかしこのような誕生の記事があることによって思われることは、主の救いはこのようにある意味では時間をかけて、前もっての主の着実なご計画と働きによって備えられて来たものであるということです。主は決して間に合わせ的に、イスラエルの中から使えそうな人を選んで士師として立ておられたのではない。もちろんこれまでの士師はみなそういう風に選ばれたと言うつもりはありません。しかしこのような記事によって、主がいかに私たちの救いを備えるために労して下さったかを私たちは見るのです。人々が誰も気づいていないところで、誰も主を呼び求めない状況で、主お一人がイスラエルを顧みて救い主を立てんとし、その器を用意し、誕生させ、育てておられる。やがて目に見える形で現われる神の働きの背後には、このように多くの人間には見えていない隠れた神のみわざが実はあるのだということを思う時、私たちはいかに一つ一つの祝福のために、さらに前にさかのぼり、私たちの知らないところでそれを準備し、働いて下さった神様を見上げて、感謝すべきでしょうか。

サムソンに勝る偉大な救い主については、もっとそうです。1ペテロ1章20節：「キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。」「前から知られていた」とありますが、これは神がキリストは将来どうなるか、あらかじめ予見していたという意味ではなく、神ご自身がこのことを定め、計画したがゆえに知っていたという意味でしょう。実に私たちの頭がついていかないことですが、神がキリストを私たちの救い主としてお遣わし下さることは、世界が始まる前から準備していたことだったということです。世界の歴史が進む中で、やむを得ず与えることを決められたのではなく、永遠の昔からあなたがたのためにご計画して下さったのだと。私たちは自分の頭の小ささをわきまえず、余計な言葉を口から出して、神がここで語っておられる御声を妨害してはなりません。むしろ静まって、神が語っていて下さるメッセージに聞くべきです。サムソンをこうして備えて下さった神は、まことの救い主を備えることにおいても、私たちの思いをはるかに越えるご自身の不思議をもって働いて下さいました。私たちの救いのためには実に多くの、はるか昔からの神のご計画と準備と働きがあるのです。私たちはその神のお姿をこの箇所を通して仰ぎ、礼拝をささげたいと思います。そしてこの神の恵みと働きを心から感謝して、神が遣わして下さいました救い主に信頼して従い、神のお心に應える歩みへ導かれて行きたいと思いません。